

《論 説》

「第二のソフィスト」にみる過去と現在

— アイリオス・アリスティデスの事例から —

増 永 理 考

【要旨】

本稿は、紀元2世紀のローマ帝国下に生きたギリシア人弁論家アイリオス・アリスティデスを事例に、当時盛んに語られた古典期（前5～前4世紀）の過去がどのように描かれ、また、現実社会とどのような関係を有するのかに迫ることで、いわゆる「第二のソフィスト」と呼ばれる知識人層たちによる活動の性格を改めて考察するものである。過去を語る行為自体に焦点を当てた結果、テキストで語られた過去の分析を掘り下げてこなかった先行研究に対して、本稿は、人々の調和に関するアリスティデスによる2篇の政治弁論を題材に、弁論に描かれる過去と現在の関係を体系的に検討した。その結果、弁論家にとって古典期の過去は、ただ礼賛すべきものではなく、競合し乗り越えるべきものとして描出されていることが明らかとなった。また、弁論家個人としても、過去の著述家に対抗しようとする意識が看取され、この点で、過去を指向する「第二のソフィスト」の活動に関しては、単なる陶醉や現実逃避というよりは、ギリシア知識人としての競争意識が根底にあったと結論づけられる。

はじめに

古代のソフィスト術は、哲学的な問題を提起するときでさえ、それらの問題を冗漫に長々と論ずるのが常だった。なにしろ、それは、勇氣について論ずるかと思えば、正義についても、英雄や神々についても論ずるし、さらには、宇宙はいかにして今の姿に造り上げられたのかということまで論じていたのである。その次の時代のソフィスト術（それは「新しい」ソフィスト術と呼ばれるべきではない。なぜなら、昔のものだから。むしろ「第二の」ソフィスト術と呼ばれるべきである）は、貧乏人と金持ちの、また、王侯と専制君主の特徴を概観し、さらには、歴史が案内してくれる特定の話題を論じた¹⁾。

これは、小アジア（現トルコ）北西沖に浮かぶレムノス島出身のギリシア人フィロストラトスの手になる著作『ソフィスト列伝』の一節である。紀元3世紀前半に著された本作品は、ときの皇帝ゴルディアヌス1世に向けて捧げられた、前5～前4世紀の古典期からおおよそ同時代までに活躍したソフィストたちの事績をまとめた伝記的著作である。その冒頭にて記される上の一節は、古来より活動するソフィストたちの類型を述べた箇所であり、著者は、論

じられる主題に応じて、「古代のソフィスト術」と「第二のソフィスト術」という分類を採用している。フィロストラトスは、この「第二のソフィスト」の嚆矢として、前4世紀のアテナイで活躍したアイスキネスを位置づけているが、彼が著作で挙げる「第二のソフィスト」は、アイスキネスを除いて、すべて1～3世紀というローマ帝政前期に相当する時期に属している²⁾。

フィロストラトスもその定義の一つとして、「歴史が案内してくれる特定の話題を論じた」と述べるように、この「第二のソフィスト」の本質的な特徴の一つは、前5～前4世紀の古典期に範を見出そうとする擬古的な傾向である。このような過去を理想化する尚古趣味は、一般に我が国でも「第二次ソフィスト運動」として理解されており、ときにこの語は、ローマ帝国支配下のギリシアにおける文化的再隆盛を指す「ギリシア・ルネサンス」を象徴するものとして、ソフィストの活動に限定されない幅広い文化的潮流を指すこともある³⁾。

「第二次ソフィスト運動」の定義はともかく⁴⁾、少なくとも、本稿で論じるローマ帝政前期におけるギリシア人弁論家たちの目線が過去に向けられていたことは間違いない。彼らが展開した弁論については、かつての花形であった政治弁論や法廷弁論は相対的に後景に退き、演示弁論なるものが主流を占めるようになったことが知られる⁵⁾。この演示弁論は、法廷弁論などのように、何らかの実益を目的としたものというよりは、まさに弁論術を示すための弁論である。そのような弁論として、例えば、『アテナイ人たちを海上覇権から引き離そうとするイソクラテス⁶⁾』などのように、前5～前4世紀に生きた弁論家の立場になり、彼らが関係する歴史的な事象を自分なりに論じる弁論が多数著された⁷⁾。

2世紀を通して活躍した、シユリア地方出身のルキアノスという風刺作家は、弁論家になるための心得や注意事項を皮肉たっぷりに描いた『弁論教師』というギリシア語作品にて、次のように述べている。

さらにまた、まぬけなイソクラテスであろうと、優美さとは無縁なデモステネスであろうと、しらじらしいプラトンであろうと、君は昔の人のものを読んだり決してしないように。そうではなくて、われわれの少し前の人たちの弁論や例のいわゆる模擬弁論を読み、ちょうど貯蔵室から取り出してくるように、時宜に合ったときにそれらの弁論を用いることができるようにしなさい⁸⁾。

この一節は、ルキアノスが風刺する弁論家の言であるため、作家の本心は逆の意味であることは疑いない。すなわち、一流の弁論家になるためには、最近の弁論家ではなく、イソクラテス、デモステネス、あるいはプラトンのような古典期に属する著作家による作品に精通した上で、彼らの文章を自在かつ効果的に引用することが目指されたのである。実際、こうした古典期に範を求める傾向は、本稿でも論じるように、模擬的な演示弁論のみならず、称賛演説など様々な弁論の執筆にも影響を与えていた。

以上のような歴史的話題や引用の側面に加えて、古典期の著名な弁論家が用いた、簡潔にして洗練されたアッティカ方言を用いることも好まれ（アッティカ主義）、こうした語法の点でも過去が指向されたのである⁹⁾。

ところで、「第二のソフィスト」をめぐる研究は、主に文学の領域で展開されてきた。かつては、彼らが著した作品は、古典期に比して独創性がなく、単なる過去の模倣として軽視されてきたが¹⁰⁾、20世紀後半ごろより、当該期ギリシア人のアイデンティティの問題を論じる研究や、彼らによるパフォーマンスの側面に注目した研究など、徐々に独自かつ積極的な意義づけがなされるようになってきている¹¹⁾。他方、歴史学の分野でも1960年代のBowersockの研究以来、「第二のソフィスト」への関心は高まってきたが、テキストを超えたソフィスト個人の社会的、政治的位置づけなどを追究する傾向が強い¹²⁾。しかしながら、後述するように、「第二のソフィスト」たちの弁論テキストそのものを、彼らが生きたローマ支配下のギリシア都市という現実社会の文脈に位置づけなおす余地が依然残されていると筆者は考える。

このように、ローマ帝政期という時代にソフィストたちを正確に落とし込む作業の一環として、本稿では、「第二のソフィスト」の本質とも言える、彼らによる過去の語りを、彼らが生きた現実との対比において考察し、同時代における彼らの意義を新たにつきつめていくこととする。

第1章 先行研究と問題の所在

「第二のソフィスト」にみられる過去の語りについて、初めて本格的に論じられたのは1970年のE. L. Bowieによる研究である¹³⁾。彼は、ソフィストたちのアッティカ主義に代表される擬古趣味は歴史書や小説、さらには建築などローマ帝政前期のギリシア世界における様々な文化的活動に浸透していたと述べる。彼によれば、この背景には、ローマの支配によるギリシア都市における自治・独立の名目化、およびその結果としての政治的衰退があり、多様な場面での過去への没頭は、不満募る現実からの逃避として、栄光ある過去と悲惨な現状とのコントラストを和らげていたという。このような状況下、ソフィストたちは、古典期に関する架空の演示弁論を通じて、過去の幸福な日々を語ったのである。

1980年代初めに、ギリシア世界における演示弁論について、その主題や叙述のあり方を体系的に検討したD. A. Russellも、Bowie同様——上のBowieの研究は参照していないようだが——、現実逃避としての過去への集中という見解を述べる¹⁴⁾。Russellは、演示弁論における同時代の状況への示唆についてその可能性を指摘するも、基本的にはBowieと意見を同じくし、弁論家は主に過去に生きており、彼らによって語られる過去の栄光は、現在を相対的に重要でないものとする、と主張した。

上記のBowieによる主張は90年代にも十分な影響を保っていた。G. Andersonは、「第二

のソフィスト」の問題においてしばしば設定される、ギリシアとローマをはじめとする様々な境界を横断的に分析する中で、Bowieの研究に触れている¹⁵⁾。彼は概ねBowieの成果を受容しながらも、独自の考察として、ソフィストたちにとって過去は遠く隔たったものではなく、より身近なものとして認識されていたこと、そして、保守的な傾向にある当時の教育システムそのものが尚古趣味的傾向に影響を与えていたことを加えている。

これらの研究において、「第二のソフィスト」の主たる弁論として取り上げられる演説弁論は、すでに述べた通り、古典期に関わる主題に加えて、古典期の著名な著述家が用いたアッティカ方言を用いることが良しとされた。この語法を鍵として議論を進めたのが、本邦の南川高志の研究である¹⁶⁾。南川は、アッティカ主義を中心とする当時の古典回帰的傾向を、内容的な創造性の追究を伴わない、単なる「形式」や「外観」の回復に努めるものと評価する¹⁷⁾。彼はさらに議論を展開し、このような尚古趣味的傾向の特質と同時代の政治状況がリンクすると述べる。すなわち、当時における実際のギリシア人共同体もまた「ポリスの思考」を欠き、形骸化していたのである。

このように、文化的尚古趣味傾向を同時代の社会の中に実証的に位置づけたことは、Bowieの議論における不足を補う点で新しいが、80年代から現在にかけて急速に発展してきた研究により、ローマ帝政期のギリシア都市の衰退そのものが見直されている以上¹⁸⁾、現在では、Bowieの見解も含めて、当時の尚古趣味的傾向とギリシア人共同体の衰退を単純に結びつけて考えることは難しいように思われる。ただし、後述するように、Bowersockに基づく南川の研究において、Bowie以上に、ソフィストたちが実際の政治の場面——使節や恩恵施与など——でも精力的に活動していた点が強調されているのは注目に値する¹⁹⁾。

1990年代後半、「第二のソフィスト」をめぐる研究はさらに加速する。S. Swainは、過去との関係におけるギリシア人のアイデンティティに大きく踏み込むと同時に、ソフィストをはじめとするギリシア知識人たちがローマをどのようにみたのかを問うた²⁰⁾。とりわけ、過去への視線という点でSwainは次のように述べる。前提として、過去としての古典期を語ることは、ギリシア人とその支配者であるローマ人とのあいだにおけるコミュニケーションの共通枠組みをなしていた。このような中で、次第にギリシア人エリートたちは政治的にローマの支配構造に組み込まれていくが、彼らのアイデンティティはローマ帝国という現実の政治世界に根ざさない以上、文化の領域でそれを主張する必要があった。その結果、帝国への統合に対する反抗として、過去を扱う文芸活動を通じてギリシアらしさやギリシア文化の保有者であることを確認していたのである。このように、Swainの研究はBowieと彼に続く研究を発展的に継承しており、Bowie以降の研究では、現在、最も参照されていると言えよう。

これまで整理してきた先行研究では、「第二のソフィスト」たちによる過去の語りは、ローマ帝国支配への反応としていかに理解されるかという問題がおよその論点として掘り下げられてきた。このような傾向に対して、Swainによる研究が発表された翌年、Th. Schmitzは、ギリシア人社会の中で過去を語ることの意義を論じた書物を刊行した²¹⁾。彼は、P.

Bourdieu による象徴資本などの理論を援用しつつ、都市有力者としてのソフィストに着目し、彼らを実社会に位置づけようと試みる。Schmitz によれば、ギリシア人エリートにとってのプライドたる古典教養（とその披瀝）は、栄えあるギリシアの伝統を強調するとともに、都市における権力構造の正当化、および特権獲得に役立ったという。ときに歴史を操作して語られる過去は、エリートの集団的アイデンティティの構築、およびギリシア世界内部におけるエリートの優越性の確保に寄与したというのが Schmitz の見解である。この研究の直後、彼は言語行為論などに基づき、過去の語りがエリートの権力強化に資するメカニズムをさらに詳しく説く論考も著している²²⁾。

欧米の研究では、基本的にギリシア・アイデンティティの内実、あるいはその変化の可能性については問われてこなかった。すなわち、古典期的なアイデンティティがそのままローマ帝政期にも尊重されたと考えられてきたのである。これに対し、我が国の長谷川岳男は、よりどころとされた「ギリシア人らしさ」が古典期とその約 500 年後のローマ帝政期とでは変化していることを論じ、語られた過去そのものを問い直す²³⁾。長谷川は、「第二次ソフィスト運動」や「パンヘレニオン²⁴⁾」など、ローマ帝政期のギリシアで生じた事象を整理した上で、S. Alcock による研究などに依拠しながら²⁵⁾、とりわけギリシア本土における諸変化には、ローマ人が理解するギリシア性が関係していたことを指摘する。というのも、スパルタに代表されるように、都市の景観や生活様式が、ローマ人が考えるギリシア認識と連動するかたちで整えられていったからである。そして、この背景には、帝国内での社会的上昇などに絡むローマ人的なギリシア理解が、ローマ人とギリシア人の接点となっていたという帝国の事情があった。以上により、長谷川は、ローマ人の価値観に準拠したギリシア人のギリシア化論を唱えるのである。この学説は、ローマ支配に対する反応としての過去への眼差しという点で先行研究と同じ文脈を共有するものの、ローマに対するネガティブな反応を前提としてきた多くの先行研究とは異なり、ローマに追従、あるいは同化しようとする当該期ギリシア人の態度を明らかにしている。

やや詳しく先行研究の整理を進めてきたが、ここまでの理解を簡単にまとめておこう。ローマ帝政期におけるギリシア人共同体の政治的衰退をどのように評価するかはともかく、ローマ支配下への編入という新たな状況を受けて、「第二のソフィスト」をはじめとする知識人を中心に、ギリシア人たちは、過去に対する憧憬の念を抱き、古典期に自分たちのアイデンティティのよりどころを見出そうとした。こうして語られた過去——ローマ人の価値観の影響を多分に受けていた——は、単に人々を懐古的雰囲気浸らせるばかりでなく、支配者であるローマ人とのコミュニケーションの枠組みを形成する一方で、ギリシア人エリートの集団的アイデンティティの形成に寄与し、都市内部でエリートとそうでない人を分かつ試金石となったりもし、少なからず現実社会において一定の機能を果たしていたのである²⁶⁾。

以上が 1970 年の Bowie の研究に始まり、2000 年代初めまでに発展してきた知見であるが、「第二のソフィスト」が抱いた過去への眼差しに関して、その重要な根拠となっているのは、

3世紀に『ソフィスト列伝』を著したフィロストラトスの伝記的記述である。実際の演示弁論のテキストも一部現在に伝わっているが、その数は多くはなく、また残っているものについても書き手に偏りがある²⁷⁾。おそらくこのような状況が影響し、先行研究では、弁論の詳細な検討を差し置いて、過去を語ること自体、つまり過去を語るという行為そのものが問題とされてきたと考えられる。加えて、「第二のソフィスト」による作品は修辞が重視されていたという理解や²⁸⁾、弁論家によるパフォーマンスの側面に関心が集中したことなども影響し²⁹⁾、語られた過去の内容を掘り下げて研究が進められることは少なかった。

このような中、従来の研究成果を踏まえて、「第二のソフィスト」を中心に当時の文芸活動の全体像を簡潔に描いた T. Whitmarsh は、架空の内容であれ、語られた過去の内容と同時代の状況との対応関係について指摘する³⁰⁾。当時の作家のあいだでは、ペルシア帝国に関する用語がローマ帝国を指し示す際に用いられることで、ローマ帝国が新たなペルシア帝国として暗に示されることがあったことから、とりわけ、非ギリシア人に対峙した古典期のギリシア人と、ローマ人に相対する現在のギリシア人とのアナロジーが、テキストの内部でも示唆される場合があるというのである。以上の Whitmarsh による指摘は、実際のテキストに則して、語られた過去の内容と現在の関係を探る方向性が示されているという点で重要である。ところが、Whitmarsh 自身も留保するように、必ずしもすべての演示弁論において過去と現在の対比が意図されているわけではないという問題がある。また、たとえテキストが残存していたとしても、弁論が披露された文脈の特定が困難であるという演示弁論自体の史的性質を考慮すると、この種の弁論によって Whitmarsh が示す研究の方向性を押し進めることは難しだろう。

ところで、「第二のソフィスト」は、そのすべてではないとしても、形式にこだわった架空の演示的な弁論ばかりを披露してきたわけではなく、ギリシア人社会を代表する者として、使節派遣などの場面で現実社会の問題をも論じていた³¹⁾。その現実的な問題というのは、何よりも彼らソフィストたちが生きたギリシア都市に関わる問題であった。そして、こうした問題を扱った現存する弁論を概観するだけでも明らかなように、実際の社会的問題が論じられる際にも、過去に関する話題が多数盛り込まれていたのである。したがって、弁論が展開された文脈が比較的特定しやすいこの手の史料は、実際にテキストを吟味しながら、そこに著された過去と現在の関係を考察するのに有効であると思われる。

もっとも、实际的な弁論における過去の問題については、先行研究で言及されてこなかったわけではないが³²⁾、正面から取り上げられてきたとは言い難い。そこで本稿では、さしあたり以下のような問いを設定する。すなわち、都市という実社会の問題を扱った「第二のソフィスト」による弁論では、ギリシア人の過去はどのように語られているのだろうか。また、その過去とは現実社会といかなる関係にあるのだろうか。そして最後に、現実との対比の中で浮き彫りになる過去の意義は、主に演示弁論から、言い換えるならば、内容の吟味というよりは、過去を語る行為そのものに焦点を当てた研究によって析出された過去の意義と

同じものなのであろうか。

これらの問題にアプローチするために、本稿では、「第二のソフィスト」の一人に数えられる弁論家アイリオス・アリスティデスの事例に着目する。このアリスティデスは、フィロストラトスによって、「居並ぶソフィストの中で最も弁論の技術に精通し³³⁾」た人物と評価されるとともに、当時のソフィストたちのうち最も多くその弁論史料を我々に伝える人物の一人である。およそ 50 点にも上る彼の現存史料の中には、実際的な政治弁論もいくつか含まれるとともに³⁴⁾、テキストとしては貴重な演示弁論もある。したがって、将来的には、弁論ジャンルの垣根を超えた総体的な像を描くことができるという可能性を秘めている。以上の理由から、アリスティデスこそが研究の手がかりとしてふさわしい人物と言えよう。

先に言及した Swain の研究でも、ローマ市民権を有していたアリスティデス、特にそのローマ支配に対する好意的姿勢と、それ以上に強く意識されたギリシア・アイデンティティについて考察がなされている³⁵⁾。その中で、政治弁論における過去と現在の対比をめぐる言及に触れられてはいるものの、Swain の主眼は、アリスティデスのローマ意識にあり、過去の問題は十分に掘り下げられているわけではない。

以下では、アリスティデスによる 2 つの弁論（『ロドスの人々へ——調和をめぐって』『諸都市における調和について』）を実際に検討し、彼による過去と現在をめぐる認識、あるいは両者を描く際のレトリックのありようを跡づけることとしたい。これら 2 篇は、アリスティデスの作品のうち、現実のギリシア都市の問題を扱った批判的な政治弁論である。この類の弁論はこれらに限られるとはいえ、この 2 篇はともに同時代における他のギリシア知識人も問題としていた人々や都市同士の不和を扱っており、現在の文脈を踏まえつつ過去の問題を探るという上に示した本稿の指針に適うばかりか、他の著作家との比較検討の回路を提供する点でもきわめて重要な史料となる。

第 2 章 『ロドスの人々へ——調和をめぐって』

具体的な史料の検討に入る前に、まず、アイリオス・アリスティデスについて簡単にその来歴をたどっておこう。彼は、117 年に、小アジア北西部のミュシア地方にて、裕福な家系に誕生したと推定されている³⁶⁾。ローマ市民権を保持していたとされる父親のエウダイモンは、息子に英才教育の機会を授けた³⁷⁾。アリスティデスが 15 歳のころ、当時、文法家としての名声を博していたコティアイオンのアレクサンドロスに師事し、彼はこのアレクサンドロスによる教育を通じて、ホメロスや、ピンダロス、プラトン、あるいはデモステネスといった、古典期の著作家をめぐる知識を獲得していった³⁸⁾。その後、アリスティデスは、ソフィストとして著名だったスミュルナのボレモンやアテナイのヘロデス・アッティコスの講義を受けたようだが、アレクサンドロスほどの影響は受けなかったという³⁹⁾。

こうした教育を受けて、晴れて弁論家として活動することとなったアリスティデスは、そ

の後、他の「第二のソフィスト」よろしく、ロドスやエジプトのアレクサンドリア、さらには都市ローマなどで弁論を披露して回る⁴⁰⁾。特に、155年ごろにローマ市で披露した『ローマ頌詞』は、ローマ帝国支配を賛美する演説としてよく知られている⁴¹⁾。

しかしながら、アリスティデスは、幼少時より身体が虚弱であり、30歳手前になると、生命に関わる重大な病に冒され、この病は、その後のアリスティデスの人生を断続的に苦しめることとなった。彼に降りかかったこの病については、弁論とは異なる彼の代表的著作『聖なる話』で事細かく明らかにされている⁴²⁾。この作品は、日記調の外観を呈しながらも、アリスティデスの修辞技法や、彼自身と医療神アスクレピオスとの宗教的関係が大いに強調されている⁴³⁾。

この『聖なる話』で述べられているように、アリスティデスを襲った病は彼の弁論活動にも影を落とした。初めて大病が発症したのは、ちょうど彼が弁論家としてのさらなるキャリアアップを目指して、都市ローマを初めて訪問するときであり、このときはその病のために満足に活動することもできず、何ら功績を残せぬまま、あえなく小アジアの故郷へと帰還している⁴⁴⁾。その他にも、彼はしばしば体調不良を原因に、弁論のために遠方の都市に赴くことを断念し、その代わりとして、演説内容をしたための書簡を送ったり、代理人を派遣したりしていた⁴⁵⁾。上に述べたように、アリスティデスは東地中海を中心に、いくつかの都市で弁論を披露することはあったが、それは体調が良好であるタイミングに限定されたものであった。

本章で検討する『ロドスの人々へ——調和をめぐって⁴⁶⁾』という作品も、体調が優れないことを理由に、アリスティデス自身が書簡というかたちで送付した弁論である。では、この弁論を概観しながら、そこで扱われる過去の問題に迫ってみよう⁴⁷⁾。

この弁論は、147年ごろに、彼が活動の拠点としていた小アジア西部のスミュルナにて書かれ、ロドスに送られたものである⁴⁸⁾。まず冒頭にて、彼は自分の身体的状況ゆえに、直接ロドスの人々の前で語ることができないことを弁明する。その上で、本弁論の主題でもあるロドスにおける「党派争い、内輪もめ *στάσις*」の問題を使者から聞き知ったことに触れ、続けて以下のように述べる（3 ※以下同様にして節番号を記す）。

それゆえ、もしレスボスの人であるテルパンドロスが生きていたなら、私はあなた方のために、彼が来るよう祈ったでしょう。しかし、あなた方は散文によって納得し、事態を改善すべきなので、私はその功績を自分のものとします。

ここで言及されるテルパンドロスは、前7世紀前半ごろに、デルフォイの神託に従ってスパルタを訪れ、歌と演奏によってこの都市の党派争いを収めたとされる伝説的な人物である⁴⁹⁾。散文である必然性については具体的に述べられていないが⁵⁰⁾、過去に党派争いを鎮めたテルパンドロスの役をアリスティデス自身が担うことが宣言されている。さらに、ここ

で「功績」と訳したギリシア語 ἀγώνισμα は、元々、「競争」という意味であり、それゆえに、アリスティデスによる弁論は、テルパンドロスとの競争としても位置づけられていると理解される。つまり、アプローチの方法は異なるものの、党派争いの解決という共通の「競技」に参加することで、過去に対抗することが弁論の主たる動機として示されているのである⁵¹⁾。

このように弁論の動機が示されると、いよいよ具体的な話に入っていく。アリスティデスによれば、政治の形態やその実践については様々な見解があるが、党派争いや既存の状態に害をなすものはあらゆる政治にとって障害であることは、万人が認めるところであるという。それに対して、安全を得るには調和を保つことが重要となるが、ロドス人はそのことを配慮していないと彼は批判する (4)。こうして、以下では最後まで縷々、党派争いの有害性、および調和の有益性が、様々な角度から論じられることになる。その中で、何度かアリスティデスは過去の歴史的事例を参照しつつ、現在における問題の深刻さを対比的に描いていく。

まず言及されるのはソロンである。このアテナイの立法者は、「民衆と有力者が一つの考えのもと都市を治めるとともに、公に益なす以上に、双方いずれも力を持たぬように、彼らをひとまとめにした」点を何よりも誇りとしていた (14)⁵²⁾。アリスティデスによれば、この逸話は、調和の重要性のみならず、それに至る方法をも示しているというのである。さらに、ソロンをはじめ、いかなる詩人や弁論家も人々の友愛や信義を説いてきたのであり、「都市の病氣」たる党派争いは一刻も早く「治療」される必要があると指摘される (15-16)⁵³⁾。つまり、ここでは調和の善性をめぐる価値の根拠が過去に求められる一方で、ソロンの功績とは対称的な現在の病的な状況が強調されている。

弁論に織り交ぜられる過去への言及は、行論と並行して次第に緻密になっていく。次に、アリスティデスは、ヘロドトスを引用しながら、戦時、あるいは平時における党派争いの問題を論じる (19)。アリスティデスは、ヘロドトスという名前自体には言及しないものの、彼の言葉「戦争が平和よりも劣るほどに、内乱は戦争に劣る⁵⁴⁾」を引き、これを否定する。アリスティデス曰く、「しばしば戦争は平和よりも好ましいものとなるが、調和より好ましい内輪もめはありえない」 (19)。具体的事例は明示されないが、過去において戦争は、金銭や名誉の獲得といった点で有益だったが、党派争いは何ら利するものがないというのである。したがって、平和よりも戦争の方が悪しきものだが、平和な時代に党派争いに明け暮れるのは、戦争に乗り出すよりも質が悪い、とアリスティデスはまとめる。

さらに彼は続ける。過去の人々は、党派争いと決別するため、党派争いよりもましな僭主政を選択したのであり、過去の立法者たちも、僭主のために立法する方が良く考えた (20)⁵⁵⁾。それほどまでに、いかなる者にとっても党派争いは耐えることができないものだったのである。また、過去において、僭主に降った都市であってもその規模を大きくし、さらには外観を洗練させた事例があるのに、党派争いによって破滅に至らなかった人を挙げるこ

とはできないのである (21)。

後段で示されるように、ここで述べられる平和な時代というのは、アリスティデスが生きるローマ帝国支配下という彼の同時代のことを指し、他方で、僭主や戦争の時代とは、いわゆる古典期のギリシア世界のことを指している。ここでは、現況の問題をいっそう明確化するために、過去の事例が参照されているが、必ずしも過去が称揚されているわけではない。むしろ、平和な時代としての現在の優越性さえも示唆されている。加えて、アリスティデスはヘロドトスの考えに挑戦していることも注目に値する。冒頭のテルパンドロスへの言及同様、ここでもアリスティデスは過去に対抗しようとしているのである。

ところで、当時のロドスは、少なくとも2世紀中葉時点では、ローマ支配下にあつて自由都市としての地位を享受していた⁵⁶⁾。こうした状況を受けて、アリスティデスは、ロドスの人々が自分の助言に耳を傾けず、党派争いを続けるのであれば、今あるロドスの自由は脅かされることになるので、不安な状態に陥ったりしないように、また、古に起源を有するロドスの人々の誇りを失わないように、党派争いから手を引くように説く (22)。この点について、アリスティデスは、次のようにさらに具体的な過去の事例を引き合いに出している (23-27)。

まず取り上げられるのは、スパルタの事例である。ロドス人と同じドーリス系のスパルタ人のもとでは、かつて党派争いに陥っていたあいだは、しばしば戦争に敗北していた。ところが、リュクルゴスによって秩序が回復されると、スパルタはギリシア人たちの指導者となったのである⁵⁷⁾。

次の例はアテナイである。この都市もまた、かつては党派争いに明け暮れていたが、僭主が廃されると⁵⁸⁾、アテナイの人々は調和を目指し、結果的に、自分たちの都市を解放するばかりか、未曾有の危機——つまり、ペルシア戦争——を脱し、ギリシア全土に自由をもたらした。アテナイ人が帝国化に乗り出したあとも、彼らは強勢を保っていたが、それは彼らの目的が一致していたあいだだけであった。まもなく、アテナイは内部分裂を起こした。これは、いわゆる三十人僭主による寡頭政権の樹立である⁵⁹⁾。その後、追放されていた人々が帰還し、不満分子を一掃すると、再びアテナイ人は調和を指向するようになる⁶⁰⁾。これによって、アテナイは再び国際的な問題に取り組み、はれてギリシア人の中で指導的立場についたのであった。

最後の事例は、ロドス人の祖先に相当するアルゴスに関するものである⁶¹⁾。アルゴスでも、かつて党派争いが蔓延していたのだが、アテナイの使節からの助言を受け、それに従ったことで、アルゴス人は党派争いに終止符を打ったというのである⁶²⁾。

以上の例を挙げた上で、アリスティデスは、「あなた方は、アテナイ人たちと同じことをする必要はありません」と述べる (29)。これまでに述べてきたことを熟考したり、敵の軍隊というよりは、党派争いによって大きく地位を変じたギリシア人にとっての共通の歴史を考慮したりするなら、節度ある振る舞いが可能であると彼は主張する。ここでは、「党派争

いによって地位を変じたギリシア人の歴史」が具体的に何のことを指すのかは明らかにされていないが、少なくとも、弁論における古典期という過去は、参考にするとしても、模倣すべきものではなく、批判的に捉えられるべきものとして位置づけられているのである⁶³⁾。

次にアリスティデスは、今現在は時代が異なるから問題ないという楽観的意見に対する反論をあらかじめ挙げる(30)。ここから議論の焦点は、過去から現在にシフトしていく。彼によれば、あらゆる党派争いというのは、常に既存の利益を損なうものであるという。特に、危険がなく幸福である現在のような場合、党派争いによってもたらされる不幸はいっそう大きくなるのであり、それに参与しては、共通の財産を自ら故意に手放してしまうことを意味するのである。そして、アリスティデスは次のように問いかける(31)。

しかし今や、党派争いの動機とは何ですか。あるいは、安逸な暮らしを送る自由はないのですか。全地上は統合され、一人の皇帝が存し、万人にとって共通の諸法があり、各人が望むように、政治に取り組んだり、沈黙を守ったり、旅をしたり、家に留まったりする安全はないのですか。実際、よそから持ち込まれた邪悪、もしくはあらゆる人々にとって不要な狂気を必要としているのは何ですか。

すでに前段で示唆されていたように、改めてアリスティデスは、現在がいかに優れた時代であるかを強調する。戦争よりも平和を上位に置く彼にとっては、ギリシア人の過去に比べても、ローマ帝国の統治下にある現在は、政治に携わる自由さえも保証された幸福な時代なのである⁶⁴⁾。このように、アリスティデスは、党派争いの無益さを説くにあたって、省みるべき過去と、その過去以上に優れた条件を有する現在の対比というレトリックにより、人々の目を現在に向けさせようとしていると考えられる。

しかしながら、アリスティデスが、ローマ帝国によってもたらされた平和的状况以上に強調するのは、ギリシア人共同体としてのロドスの伝統である(45-50)。彼が述べるには、ロドス人は、ペロポネソス半島出身のドーリス人を起源に有し⁶⁵⁾、今日まで真のギリシア人であり続けるとともに、ヘラクレスの子孫やアスクレピオスの子孫を創建者や王に持っている⁶⁶⁾。かのホメロスも特別にロドス人を称えていることに加えて⁶⁷⁾、ドーリス方言の伝統もある。このようなギリシア人としての伝統を有するだけにいっそう調和が求められるべきなのである、とアリスティデスは強調する。その上で、このような伝統に恥じないように、今現在をロドスの新たな誕生の日とするよう彼は促すのである。

弁論の締めくくりでも同様の論調が繰り返されている(58-59)。党派争いに至る自由を行使するよりは奴隷となる、すなわち、支配者としてのローマを認識することが有益であるが、それでもなお、その自由を喪失する恐れがある。とはいえ、何より重要なのは、人々の羨望を集めてきたロドスの名に恥じないように、つまり、「我々が、良き同胞としてあなた方を誇りにする一方、あなた方が、いかなるときであれ、常に説得する我々を誇りとするよう

に、自分たちを制御すべき」なのである (59)。

アリスティデスの代表作『ローマ頌詞』や『パンアテナイア祭演説』に表れているように⁶⁸⁾、確かに彼は、ローマ帝国がもたらした平和的状况を好意的にとらえる一方で、プルタルコス同様⁶⁹⁾、既存の自由を奪うローマの脅威も意識していた。しかしながら、少なくとも本章で検討した『ロドスの人々へ——調和をめぐって』での力点は、ローマ支配下にながら、ギリシア人らしさをどのように保つかという点にあると思われる。このような行論で言及される過去は、すでに述べたように、個々の動向については見習うべきものがあったても、歴史の大局的な視点からは批判的に理解されるものであった。また、戦争に満ちた古典期よりも安定した「ローマの平和」を背景とする現在は、党派争いさえなければ、過去よりも幸福に生きる条件が整っているのである。したがって、アリスティデスは、過去と現在とは時代環境こそ異なるけれども、現在からみた過去は、参照すべきものであると同時に、張り合い、ひいては乗り越えるべき対象であると考えていたのではないだろうか。また、アリスティデス個人としても、テルバンドロスやヘロドトスに挑戦していることから、彼個人の中にも過去の超克に対する意識があったことは十分に考えられよう。

では、このような過去と現在の対比のありようは、この弁論に特有なのであろうか。次章では、人々の調和をめぐるもう一つの政治弁論『諸都市における調和について』を検討しよう。

第3章 『諸都市における調和について』

本弁論は、前章の『ロドスの人々へ——調和をめぐって』から約20年経過した167年に、小アジア西部のペルガモンで開催された属州アジアの共通議会（アジア・コイノン）の場で披露されたものである⁷⁰⁾。全体的な内容は、前章の弁論同様、仲違いする人々に調和を説くものであるが、一都市内部での問題を扱った前章の弁論とは異なり、今回は都市同士、とりわけ、アジアの大都市に位置づけられるペルガモン、スミルナ、エフェソスのいさかいに關係している⁷¹⁾。

冒頭、アリスティデスは、具体名こそ示さないが、イソクラテスを念頭に置きながら、「優れた昔のソフィストの一人」が誇っていたこととして、調和の問題と野蛮な異国の人々に対する戦争という2つのテーマを論じることを挙げる (2)⁷²⁾。その上で、アリスティデスは、神々や皇帝たちのおかげで、今現在、上記の2テーマのうち、戦争に関することはもはや語る必要はないが、もう一つの調和については、自らの経験も踏まえて、有用性が高いので論じる価値があると弁論の動機を述べる (3)。ここでもまた、ロドス人への弁論同様、アリスティデスが過去の偉大な弁論家を意識しているさまが窺える⁷³⁾。

このような弁論の契機を述べたあと、アリスティデスは、アジア・コイノン、および問題となる各都市——ペルガモン、スミルナ、エフェソス——に対する称賛を展開する (8-26)。

具体的には、アジアの風土やローマ帝国内での位置づけ、ならびに、各都市の美観や神々など、現在における価値が称えられる。

この直後、諸都市への賛美の一環として、スミュルナとエフェソスがアテナイの植民市として興ったこと⁷⁴⁾、そして、ペルガモンについては、その植民者がアルカディア人を祖先としていることが述べられ⁷⁵⁾、いずれの都市もギリシア的な伝統の点で劣らない以上、属州における最善のギリシア人として、互いを友とみなすとともに、名誉を付与しあうべきことが強調される(26)。ロドス人への弁論と同じく、このようにアリスティデスは、人々のギリシア人としてのプライドを刺激する。

こうして、弁論は次第に称賛から調和の勧告へと移っていく。アリスティデスは、戦時における将軍と兵士の関係のように、人の上に立つ優れた人たち(諸都市)こそ、調和を保つことがいかに有益であるかということ、他方で、党派争いというものは、妬み、恐れ、犯罪、愚行の原因として百害あって一利なしという点などを説いていく(34-40)。

ギリシア人同士での争いがいかに愚かな選択であるのか、アリスティデスは過去の出来事から例証していく(41-52)。過去と現在とでは状況は異なるが、善のありようは普遍的であることを指摘し、彼は古典期の事例に言及する。

まず挙げられるのは、スパルタとアテナイの例である。かつて両者は、共通の目的を有し、あらゆるギリシア人から羨まれ、偉大なる善の原因となっていた。それゆえ、ペルシアの軍勢が攻めてきたときも、彼らは恐れをなすことなく、また諸都市を導く立場として、指揮権を分断することなく一致団結して対抗したのであった⁷⁶⁾。かくして、彼らが華々しく戦いに勝利し、ペルシア勢を退けることに成功したのは、まさに調和がもたらした結果であった。

ところが、ペルシア戦争後、アテナイとスパルタは、ギリシアにおける指導権をめぐる争い——いわゆるペロポネソス戦争——を始め、「双方の扇動者や指導者たちは、未来を見据え、大衆を抑制しなだめる代わりに、一日の喜びのために未来すべてを犠牲にして、諸都市を駆り立て、対立へと至らせた」のであった(48)⁷⁷⁾。この争いによって、アテナイは多大な被害を受け、かたやスパルタは覇権を獲得するも、それは束の間のことであった。今度は、第3の都市たるテーバイが、アテナイ、スパルタを凌駕するようになったのである。こうして、テーバイが力をつけるも、ギリシアでは共通のために物事が実行されることはなく、まもなくして、「フォキス戦争、テルモピュライの騒擾、恥ずべき事態」が立て続けに生じた(51)⁷⁸⁾。そして、この事態に対してマケドニアが終止符を打つことになったのである。このように、ギリシアの歴史をたどるアリスティデスは次のようにまとめる(51)。

かのあらゆるものは、地面の下に浸透する水のように沈んでしまいました。その結果、現在の支配者たちの徳によって修復された、ギリシアのほんの小さな残余がかろうじてあなた方に伝わっているだけなのです。

歴史を根拠とする例証はさらに続く。アテナイ一つをとっても、ペルシア戦争時には、調和を維持していたがゆえに、アテナイ人はあらゆる人々に優っていたが、ペロポネソス戦争やシチリア遠征、および同盟諸市の離反などが生じた時期には、アテナイは党派争いに明け暮れ、ついには三十人政権が確立することとなった⁷⁹⁾。その後、追放されていた民主派が政権を取り戻したとき、アテナイはかつての評判や地位を回復したのであった⁸⁰⁾。

前章のロドス人への弁論では、「党派争いによって地位を変じたギリシア人の歴史」については具体的に明示されなかった。ところが、『諸都市における調和について』では、ペロポネソス戦争からマケドニアの征服までのあいだこそ、ギリシアが党派争いの弊害を最も被った時期として位置づけられている。また、個別の都市の事例に関しては、アテナイにおける三十人政権の樹立とその打倒が、党派争いの事例として繰り返されている。ここでも、アリスティデスが提示するギリシアの過去は、やはり反面教師的に描かれているのである。

ここで再び、アリスティデスは、『ロドスの人々へ——調和をめぐって』同様、戦時と平時という点で、過去と現在の対比を図る(53)。

もし誰かが、今やいかなる戦争もないのだからこれらはたわごとだ、と考えるなら、その者は自分がおかしなことを言っているのを理解していないのです。

戦争の時代であれ、平和の時代であれ、党派争いは常に害悪でしかないものであり、今現在、人々は戦争という悪から守ってくれるという理由で支配者たちに感謝するのに、戦争よりもひどい党派争いを選択するのは、何にもまして奇妙なことなのである(54)。過去における戦争は、慎重深さや勇敢さについて人々の評判を高め、さらには、将来、安全を享受することができるといった感覚を与えるものである(57)。それに対して、党派争いは、あらゆる恥ずべき悪を蓄積したもので、人々を平等にすることはおろか、誰かを他者に優れた存在にすることもない。以上のような、党派争いの普遍的有害性をめぐる主張は、ロドス人に対する弁論とほとんど同一である。

これを受けて、アリスティデスは、さらに過去と現在のコントラストを浮き彫りにしていく(59-62)。スパルタ人、アテナイ人、そしてテーバイ人は、ギリシア人の指導権など現実的な問題をかけて争っていた。彼らの行いは手放しで称賛できるものではないが、「彼らの病気は一定の意味を有していた」のである(59)。では、現在の人々はいかなる理由で仲違いしているのか、とアリスティデスは問う。また古典期には、アテナイ人にしろ、スパルタ人にしろ、しかるべきギリシア人の指導者がいたのであり、人々は誰であれそのような指導者に満足していたし、フィリッポスやアレクサンドロスに喜んで自分たちを差し出した。そして、現在はその指導的役割をローマが担っているにすぎない。

党派争いが時代状況に左右されず、普遍的に有害であること、そして、ローマの統治下にある以上、仲違いしてまで競うべきものがないことを踏まえて、アリスティデスは、現在に

あつては、争いの契機となる「私有」を避け、「共有」を重視すべきと述べる（65-79）。この「共通のもの」を有している感覚に誇りを抱くべきなのであるが、ここでアリスティデスが述べる「共通のもの」とは、物質的な所有物というよりは、むしろ善についての感覚である。この善の感覚こそが、「諸都市の真なる装飾であり、至善なる砦であり、最も立派な威容」とされる（76）。そして、この善の手本となるのが、自分たちの支配者であるローマ皇帝なのである。

弁論の末尾では、問題改善に対する期待や希望が述べられるが、それと同時に、問題の責任の所在が、現在争っている人々ではなく、この問題を論じてこなかった他の弁論家にあることが指摘される。アリスティデスは、彼らは誰も改善に向かわせることなく、また人々の感情を損ねてしまうことを知っているという理由で沈黙を守っているようにみえると推測し、次のように述べて弁論を締めくくる（80）。

我々はみな名誉を求める競合に参加しようではないですか。私にも、あらゆる善意や果敢さとともに、あなた方に最善の助言を与えさせてください。そして、あなた方は、これらのことをあなた方に述べるが無駄ではないこと、および最善なる助言を与える者を利用することをご存知であることを示してください。

ここで言う「名誉を求める競合」とは、党派争いのような有害な競争ではなく、同胞であるギリシア人をより良い方向に向かわせるための説得の競争を指していると考えられる。前章で検討したロドス人への弁論冒頭では、前7世紀のテルバンドロスへの対抗が意識され、本章の弁論では、競争として明確に位置づけられてはいないが、古典期のイソクラテスが意識されていた。このように、弁論の動機として、過去の偉人への対抗を念頭に置くアリスティデスであるが、その競争意識は過去だけでなく、上記引用のように、現在にも向けられている⁸¹⁾。つまり彼には、過去と現在という二重の競争意識がはたらいていたのであり、いうなれば、それは過去も含めたギリシア人のあいだにおける価値を追求することにほかならない。

このような意識は、弁論の内容そのものにも反映されているように思われる。ロドスへの弁論同様、『諸都市における調和について』においても、途中で語られる古典期という過去は、アテナイ人やスパルタ人などによる一部の協調的行動については見習うべきではあるが、長期的には、彼らは調和を乱し混乱に陥った以上、反省すべき対象として描かれている⁸²⁾。近年、当該弁論について論じた E. Bianco は、アリスティデスが取り上げる栄光ある過去の話題について、現在に則して彼が新たに構築する調和理論の基礎として、その積極的意義を強調するのみで、過去が有する負の側面に関しては見落としている⁸³⁾。

ロドスへの弁論でも指摘されていたように、アリスティデスの時代では、ローマ人がギリシア人の支配者として君臨し、ギリシア人が享受している一定の自由をも奪い去る恐れがあ

るが、それでも、現在は彼らローマ人のおかげで、古典期には満ち溢れていた戦争はなくなり、安寧が確保されている。アリスティデスは、このような状況下で普遍的悪である党派争いを抑止し、偉大な栄光としての調和や善を実践しさえすれば、系譜などの伝統に根ざすギリシア人としての矜持を保ちつつ、過去以上に幸福な生を送ることができる⁸⁴⁾と説く。つまり彼は、過去と現在とではその背景こそ違えど、現在の人々は、同じギリシア人として競って過去に対抗し、さらにはその過去を乗り越えるべきであると教唆しているのである。

おわりに

1980年代に、ローマ帝国下のギリシア都市における調和の問題を論じた A. R. R. Sheppard は、本稿で扱ったアリスティデスの史料を用い、特に彼が理解する調和については、ローマ帝国に対する忠誠の枠組みに位置づけられ、帝国がもたらす秩序を正当化する基礎として提示されていたと分析した⁸⁴⁾。他方、第1章末尾で触れたように、Swain は、アリスティデスについて、ローマ帝国による支配を好ましいものと捉えてはいるが、彼にとってはギリシア世界の方が重要であり、ローマに対する好意以上に、彼のギリシア・アイデンティティは強固なものであった、と唱えた⁸⁵⁾。このように、先行研究では、アリスティデスのローマ観が重要な論点として注目されながらも、そのローマ観は、彼のギリシア・アイデンティティとの比較の中で相対化されてきたのである⁸⁶⁾。

このような流れの中、本稿での検討は、過去と現在の関係という点で、Swain が述べるアリスティデスのギリシア意識の内実をさらに追究したものとして位置づけられよう。ローマ支配に都合が良い現在に対する理解を披露し、半ばローマに追従的でさえあるアリスティデスであるが、本稿で検討した2編の弁論の力点は、ギリシア人としての誇りをいかに保つかという点に置かれていた。そのような中、彼はしばしば過去の事例を引き合いに出すが、必ずしもその過去は現在の人々が立ち返るべきものとしてではなく、省みるべきものとして提示されていた。また、党派争いは時代によらず有害であること、そして、戦争が頻発していた古典期よりも、ローマによって平和が保たれた現在の方が幸福であることから、現在において、党派争いに明け暮れることはいっそう悪しき行いであることが主張されていた。換言するならば、現在において、党派争いを放棄し、現在の枠組みで調和を保ちさえすれば、ギリシア人として、幸福や善などの点で過去を超越することが可能になると述べられるのである。すなわち、アリスティデスにとっての過去とは、単にギリシア・アイデンティティを確認するためのものではなく、一部賛美し参考にしつつも、全体としては、競い、さらには超えていくべきものだったのである。少なくとも、弁論の中ではこのように描かれている。

アリスティデスよりも前の紀元1世紀ごろに活躍した弁論家ディオンのクリュソストモスについても同様のことを指摘することができる。K. Jazdzewska が明らかにしているように、ディオンはしばしば古典期、あるいは彼と同時代のアテナイをネガティブに描き、その栄え

ある過去を褒めそやすことはあっても、現在を含む長期的な視点からは、アテナイを衰退のモデルとして提示していた⁸⁷⁾。彼女によれば、そのような描写には、同時代人の競争精神に訴える意識がはたらいていたという。実際、ディオオンもまた、ロドスの人々に対して、アテナイ人らと張り合うことを示唆しているのである⁸⁸⁾。

過去との競争は、アリスティデス個人の問題でもあった。『ロドスの人々へ——調和をめぐる』では、スパルタで党派争いを鎮めたテルパンドロスが、党派争いの調停という「競技」の相手として想定されるとともに、ヘロドトスの説が批判されていた。他方、『諸都市における調和について』では、古典期の弁論家としてきわめて名高いイソクラテスが、競合すべき相手として意識されていた。本稿で検討した政治弁論以外にも、アリスティデスは『聖なる話』の中において、自分がデモステネスに優っていると人から言われたことを励みとしていたことを書き記している⁸⁹⁾。

この点は、「第二のソフィスト」の本質を考える上で大きな重要性を持つのではないかとされる。過去を題材とした演説弁論を精力的に発表していた「第二のソフィスト」たちは、単に過去の出来事を再演していたのではなく、過去の題材に依拠しつつも、現在の観点から独自の解釈や展開を織り交ぜていた⁹⁰⁾。例えば、ディオオン・クリュソストモスは、『トロイア弁論——イリオスは陥落しなかった』という作品にて、ホメロスによって語られるトロイア戦争の勝者は、トロイア側であったことを論証する⁹¹⁾。この弁論を邦訳し、解説を加えた内田次信によれば、本作で重要なのは、「真実らしいフィクションという弁論術的創作的理論」であるという⁹²⁾。すなわち、史実如何はさておき、もっともらしい論証をいかに展開できるかという弁論の技術が問われていたのである。このように、過去を素材とした演説弁論は、弁論技術をめぐる過去そのものに対する挑戦だったと理解されよう。だとすれば、「第二のソフィスト」たちにとっての過去とは、憧憬の対象であると同時に、過去の作家以上の弁論技術を示すための材料でもあったと考えられる。もちろん、これに成功すれば、同時代においても弁論家としての名誉を高めることになったに違いない。

このような理解があったからこそ、過去に対する競争において、その「ルール」をできる限りそろえるために、古典期の作家たちが用いたアッティカ方言が積極的に用いられたのではないだろうか。他方、アリスティデスは、過去と現在の社会状況が異なることを認識しつつ、イソクラテスが語った弁論のうち、党派争いの問題こそ現代でも語るにふさわしいとして、弁論の契機を語っていた。弁論の内容としても、現実社会を勘案して、競争の条件が整えられていたのである。以上を勘案すると、少なくとも「第二のソフィスト」たちが扱う過去に関しては、もはや表層的な修辞に拘泥する単なる懐古趣味としてではなく、現在に生きるギリシア人の優位性を示すために引き合いに出されたと理解する必要がある。

また先行研究は、過去への言及に関して、懐古趣味という意味合いを超えて、ローマとのコミュニケーションやエリートのアイデンティティ構築といった現在の機能も明らかにしてきた。もちろん、こうした機能が実際に意図されたかどうかは慎重にならなければならな

いが、本稿で明らかにしたように、「第二のソフィスト」たちに深く根ざしたギリシア人同士——過去のギリシア人も含む——の競争をめぐる感覚が重要だったとすれば、彼らにとってのローマという存在は競争のための背景を担っていることを意味しよう。この点をさらにつきつめていけば、ギリシア知識人のローマに対する態度やギリシア人社会のありようについても新たな像を提示することができるのではないだろうか。

本稿の見解は、むろん即座に一般化することはできず、アリスティデスの一般性や特殊性を浮き彫りにするためにも、例えば、上に言及したディオオン・クリュソストモスなどとの比較が必要である。特に、このディオオンについては、演示的な弁論に加えて、政治的な弁論もいくつか伝わっており、その中には、アリスティデス同様、人々の調和を論じたものも含まれているため、比較対象としては最適である⁹³⁾。これらについては今後の課題としたい。

註

※史料や欧語文献の略称は、S. Hornblower and A. Spawforth (eds.), *The Oxford Classical Dictionary*, 4th ed., Oxford, 2012、および Web サイト *L'année philologique* (<http://cpps.brepolis.net/aph/search.cfm>? 最終閲覧 2020 年 10 月 10 日) に掲載されているものに原則従った。

- 1) Philostr. *V S* 481. 邦訳は、ピロストラトス、エウナピオス（戸塚七郎、金子佳司訳）『哲学者・ソフィスト列伝』京都大学学術出版会、2001 年より引用。
- 2) Philostr. *V S* 481; 507. アイスキネスの次に紹介されるのは、1 世紀半ば、ネロ帝期に活躍したニケテスである。
- 3) 桑山由文「ローマ帝政期のギリシア」金澤周作監修、藤井崇、青谷秀紀、古谷大輔、坂本優一郎、小野沢透編著『論点・西洋史学』ミネルヴァ書房、2020 年、32-33 頁。「第二次ソフィスト運動」の問題圏の広さは、D. S. Richter and W. A. Johnson (eds.), *The Oxford Handbook of the Second Sophistic*, New York, 2017 の各章題を概観するだけでも十分理解できよう。なお、「ギリシア・ルネサンス」については、S. Walker and Av. Cameron (eds.), *The Greek Renaissance in the Roman Empire*, London, 1989 を参照。
- 4) T. Whitmarsh, *The Second Sophistic*, Oxford, 2005, 4 によれば、研究上用いられる「第二次ソフィスト運動 the Second Sophistic」が意味するところは、歴史的な時代区分、文学的な時代精神、あるいはローマ帝政期ギリシアにおける弁論をめぐる慣習など、研究者によって様々であり、1～3 世紀のギリシア世界における文化的特色という曖昧な意味以上に、確固たる共通の定義に欠けるといふ。また、Whitmarsh は、現代の価値観も「第二次ソフィスト運動」の問題圏を形成するのに大きく関係していると強調する。
- 5) S. Swain, *Hellenism and Empire: Language, Classicism, and Power in the Greek World, AD 50-250*, Oxford, 1996, 90; Whitmarsh (2005), 3.
- 6) Philostr. *V S* 584. 訳は戸塚七郎、金子佳司による。
- 7) Swain (1996), 92ff.
- 8) Lucian *Rh. Pr.* 17. 邦訳は、ルキアノス（戸高和弘訳）『弁論教師』ルキアノス（内田次信、戸高和弘、渡辺浩司訳）『偽預言者アレクサンドロス 全集 4』京都大学学術出版会、2013 年より引用。
- 9) アッティカ主義、ならびにそれに対立したアジア主義など語法をめぐる問題については、L. Kim, "Atticism and Asianism", in Richter and Johnson (2017), 41-66 を参照されたい。
- 10) 高津春繁、斎藤忍随『ギリシア・ローマ古典文学案内』岩波書店、1963 年、88 頁は、ローマ帝政期のギリシア文学を「無味乾燥な、内容の空虚な美文の山」と評する。B. A. van Groningen, "General Literary Tendencies in the Second Century A. D.", *Mnemosyne* 18-1 (1965), 41-56 は、この

時代の文芸を「知的、感情的要素において貧弱」とまで断じている。

- 11) Whitmarsh (2005), 8f.
- 12) G. W. Bowersock, *Greek Sophists in the Roman Empire*, Oxford, 1969; E. L. Bowie, "The Importance of Sophists", *YCIS* 27 (1982), 29-59. Bowersock は、都市や帝国で華々しく活躍する「第二のソフィスト」たちの姿を浮き彫りにし、その弁舌や教養こそが彼らの社会階梯上昇に寄与していたと述べる。これに対して、Bowie は、ソフィストたちの多くは、元々、有力家系に属しており、彼らの弁才は社会的地位を得る上で絶対的な役割を果たしていたわけではなかったと Bowersock の学説を批判する。また、ソフィストたちの社会的役割については、本邦でも以下の研究がある。桑山由文「元首政期ローマ帝国とギリシア知識人」『史窓』65 (2008 年)、19-32 頁; 西又悠「元首政期小アジアの都市間紛争解決と有力者の関与——ディオ・クリュソストモスの弁論を手がかりに」『神戸大学史学年報』33 (2018 年)、1-21 頁。
- 13) E. L. Bowie, "Greeks and Their Past in the Second Sophistic", in M. I. Finley (ed.), *Studies in Ancient Society*, London, 1974, 166-209 (originally, *P & P* 46 (1970), 3-41).
- 14) D. A. Russell, *Greek Declamation*, Cambridge, 1983, esp. 106ff.
- 15) G. Anderson, *The Second Sophistic: A Cultural Phenomenon in the Roman Empire*, London, 1993, esp. 101ff.
- 16) 南川高志「ローマ帝国とギリシア文化」藤縄謙三編『ギリシア文化の遺産』南窓社、1993 年、77-108 頁。
- 17) 南川 (1993 年)、90 頁以下は、H・I・マルー (横尾壮英、飯尾都人、岩村清太訳)『古代教育文化史』岩波書店、1985 年に基づき、Lucian *Rh. Pr.* 16-17 (不必要なまでにアッティカ語法という外観に拘泥するさまを風刺する一節) を引き、ルキアノスが批判するのは、「黄金期のアテナイの著作家の語句や構文だけを使用したり、使用する語句や構文の過去の使用例を挙げることができる能力が評価の対象となった」点であると指摘する。ところが、風刺であることに注意しつつ Lucian *Rh. Pr.* 10; 17 を読むならば、ルキアノスは、デモステネスらの作品を参照・模倣し、必要に応じて、それらを自在に利用すべきことを説いているように思われる。したがって、ルキアノスが実際に批判するのは、アッティカ語法の利用そのものというよりは、弁論の中身にそぐわない、むやみやたらな過去の言葉への固執であろう。cf. Kim (2017), 43f.
- 18) 例えば、G. Salmeri, "Dio, Rome, and the Civic Life of Asia Minor", in S. Swain (ed.), *Dio Chrysostom: Politics, Letters and Philosophy*, Oxford, 2000, 53-92; A. Heller, « *Les bêtises des Grecs* »: *conflits et rivalités entre cités d'Asie et de Bithynie à l'époque romaine (129 a.C. - 235 p.C.)*, Bordeaux, 2006; A. Chanotis, *Age of Conquests: The Greek World from Alexander to Hadrian*, London, 2018. また、増永理考「元首世期小アジアにおける見世物と都市——アフロディシアスの事例を中心として」『史林』98-2 (2015 年)、388-420 頁も参照されたい。
- 19) 南川 (1993 年)、93 頁。cf. Bowersock (1969), 17-58.
- 20) Swain (1996). とりわけ、65-100; 409ff. を参照。
- 21) Th. Schmitz, *Bildung und Macht: zur sozialen und politischen Funktion der zweiten Sophistik in der griechischen Welt der Kaiserzeit*, Munich, 1997.
- 22) Th. Schmitz, "Performing History in the Second Sophistic", in M. Zimmermann (Hg.), *Geschichtsschreibung und politischer Wandel im 3. Jh.n.Chr.*, Stuttgart, 1999, 169-180. 言語行為論については、増永理考「言語行為論を通してみる碑文——史料論的一考察」『西洋古代史研究』16 (2016 年)、1-23 頁も参照されたい。
- 23) 長谷川岳男「ギリシア「古典期」の創造——ローマ帝政期におけるギリシア人の歴史認識」『西洋史研究』新輯 32 (2003 年)、24-55 頁。
- 24) パンヘレニオンとは、「汎ギリシア」を理念に掲げ、「アテナイを中心として、ギリシア世界のさまざまな都市 (ポリス)、連邦 (エトノス) から成る、一種の都市同盟」と理解される。桑山由文「パンヘレニオンとローマ帝国」『古代文化』62-1 (2010 年)、82-89 頁。
- 25) S. Alcock, *The Archaeologies of the Greek Past: Landscape, Monuments, and Memories*, Cambridge, 2002.

- 26) ソフィストではないが、2 世紀に『ギリシア案内記』を著したパウサニアスについて検討した、大野普希「パウサニアスのギリシア観——ローカルな次元からの再解釈」『西洋古代史研究』19 (2019 年)、1-32 頁、特に 4-5 頁も過去の現在の機能について強調する。
- 27) Russell (1983), 107 は、弁論家によって採用された歴史的テーマは 350 に上ると指摘する。ただし、この数字がどのように算出されたかは明らかにされておらず、1～3 世紀という範囲を超えて、ヘレニズム時代や帝政後期の史料が含まれている可能性がある。とはいえ、Russell が挙げる、現存する 1～3 世紀の演説弁論テキストはせいぜい 20 点程度であり、しかもそのほとんどが、本稿で詳述するアイリオス・アリスティデスのものである (Russell (1983), 4f.)。なお、C. P. Jones, “The Survival of the Sophists”, in T. C. Brennan and H. I. Flower (eds.), *East and West: Papers in Ancient History Presented to Glen W. Bowersock*, Cambridge, Mass., 2008, 113-125, esp. 118f. もまた、フィロストラトスが挙げるソフィストの演説弁論テキストがほとんど残存していないことを指摘する。
- 28) 例えば、Anderson (1993), 114ff. また、南川 (1993 年)、91-92 頁や長谷川 (2003 年)、42 頁など本邦の研究でも同様の理解は受容されている。
- 29) M. W. Gleason, *Making Men: Sophists and Self-presentation in Ancient Rome*, Princeton, 1995; Schmitz (1999); J. Connolly, “Reclaiming the Theatrical in the Second Sophistic”, *Helios* 28 (2001), 75-96; Whitmarsh (2005), 23-40.
- 30) Whitmarsh (2005), 66-70.
- 31) 小アジア西部のスムルナで活躍したソフィスト、ポレモンは、ローマ皇帝のもとに派遣され、同市の便宜を図る弁論を披露している (Philostr. *V S* 531)。同じくスムルナを活動拠点していたアイリオス・アリスティデスは、マルクス・アウレリウス帝に向けて、地震によって倒壊した都市の再建を促す哀悼詩を捧げている (Philostr. *V S* 582)。
- 32) 例えば、C. P. Jones, *The Roman World of Dio Chrysostom*, Cambridge, Mass., 1978, 35; 43; 75.
- 33) Philostr. *V S* 585. 訳は戸塚七郎、金子佳司による。
- 34) アリスティデスの政治思想については、S. A. Stertz, “Aelius Aristides’ Political Ideas”, in W. Haase (Hg.), *ANRW II. 34. 2*, Berlin, 1994, 1248-1270 がある。
- 35) Swain (1996), 254-297.
- 36) Ch. A. Behr, “Aelius Aristides’ Birth Date Corrected to November 26, 117 A.D.”, *AJPh* 90 (1969), 75-77; Id., “Studies on the Biography of Aelius Aristides”, in Haase (1994), 1140-1233, esp. 1141-1151.
- 37) Ch. A. Behr, *Aelius Aristides and the Sacred Tales*, Amsterdam, 1968, 5-9.
- 38) Behr (1968), 11.
- 39) Behr (1968), 12f. 実際、アリスティデスは、アレクサンドロスの死後、彼がいたコティアイオンに向けて、アレクサンドロスを称える葬送の言葉を書簡で送っている。Aristid. *Or.* XXXII. なお、アリスティデスの史料番号は、Ch. A. Behr (tr.), *P. Aelius Aristides, The Complete Works vol. II*, Leiden, 1981; Id. (tr.), *P. Aelius Aristides, The Complete Works vol. I*, Leiden, 1986 に従う。
- 40) Behr (1968), 14-17.
- 41) Aristid. *Or.* XXVI. 当該史料については、J. H. Oliver, *The Ruling Power: A Study of the Roman Empire in the Second Century after Christ through the Roman Oration of Aelius Aristides*, Philadelphia, 1953 が詳しい。また、アリスティデスと皇帝崇拜の問題を扱った研究として、阪本浩「アエリウス・アリスティデスにおける皇帝礼拝」『西洋古典学研究』35 (1987 年)、91-100 頁がある。
- 42) Aristid. *Or.* XLVII-LII. 『聖なる話』をめぐる研究については、さしあたり以下を挙げる。A. Boulanger, *Aelius Aristide et la sophistique dans la province d’Asie au II^e siècle de notre ère*, Paris, 1923, 163-209; Behr (1968); L. Percy, “Theme, Dream and Narrative: Reading the *Sacred Tales* of Aelius Aristides”, *TAPA* 118 (1988), 377-391; A. Petsalis-Diomidis, “Sacred Writing, Sacred Reading: The Function of Aelius Aristides’ Self-presentation as Author in the *Sacred Tales*”, in B. McGing and J. Mossman (eds.), *The Limits of Ancient Biography*, Swansea, 2006, 193-211; I. Israelowich, *Society, Medicine and Religion in the Sacred Tales of Aelius Aristides*, Leiden and Boston, 2012; U. Bittrich, *Traum – Mantik – Allegorie: die “Hieroi Logoi” des Aelius Aristides im weiteren Kontext der griechisch-römischen Traumliteratur*, Berlin und Boston, 2017.

- 43) J. Downie, *At the Limits of Art: A Literary Study of Aelius Aristides' Hieroi Logoi*, New York, 2013.
- 44) Aristid. *Or.* XLVIII. 59-63.
- 45) Aristid. *Or.* L. 76; 103.
- 46) Aristid. *Or.* XXIV. 当該弁論については、C. Franco, “Aelius Aristides and Rhodes: Concord and Consolation”, in W. V. Harris and B. Holmes (eds.), *Aelius Aristides between Greece, Rome, and the Gods*, Leiden, 2008, 217-249, esp. 238ff. も参照。Franco の論考でも、弁論中における過去への言及について触れられているが、その問題が体系的に論じられているわけではない。
- 47) 本稿で用いるアリスティデスのテキストは以下を参照。Aelius Aristides, *Aristides ex recensione Guilielmi Dindorfii*, Leipzig, 1829 (<http://www.perseus.tufts.edu/hopper/> 最終閲覧 2020 年 10 月 10 日); B. Keil (ed.), *Aelii Aristidis quae supersunt omnia*, vol. 2, Berlin, 1898 (<https://archive.org/details/quaesupersuntomn02arisuoft/page/n3/mode/2up> 最終閲覧 2020 年 10 月 10 日)。なお、本稿におけるアリスティデスの史料訳はすべて筆者による。
- 48) Behr (1994), 1204 を参照。Behr (1981), 368, n. 1 では、この書簡が送られたのは 149 年ごろと推定されているが、Behr はのちになって 147 年に修正している。
- 49) Behr (1981), 369, n. 5. テルパンドロスについては、S. Hornblower and A. Spawforth (eds.), *The Oxford Classical Dictionary*, 4th ed., Oxford, 2012, 1443, s.v. “Terpander” も参照。なお彼は、直接的に言及されはしないが、当該弁論の最後 (Aristid. *Or.* XXIV. 55) でも再び登場する。しかし、テルパンドロスがスパルタに赴いたことが繰り返し示唆されるにとどまる。
- 50) 少なくともアリスティデスは、アスクレピオスをはじめとする神々への賛歌を、詩ではなく散文で著しているように、彼には散文に対する強いこだわりがあった。Downie (2013), 127-153.
- 51) テルパンドロスについて、Franco (2008), 239 では、弁論に権威をもたらす事例として位置づけられるのみで、競争という観点については踏み込まれていない。
- 52) E. Diehl (ed.), *Anthologia Lyrica Graeca fasc. 1*, Leipzig, 1954, 31f., Solon frg. 5.
- 53) cf. Dio Chrys. *Or.* XXXVIII. 38. 1～2 世紀にかけて活躍したギリシア人弁論家ディオ・クリュストモスは、虚栄に満ちたギリシア人の争いがローマ人によって、「ギリシアの過ち ἑλληνικά ἀμαρτήματα」として嘲笑されていると述べる。
- 54) Hdt. VIII. 3.
- 55) cf. Pl. *Leg.* 710 D-E.
- 56) Franco (2008), 244f. なお、ロドスは 1 世紀に、ローマ当局によって 2 度自由を奪われている。Dio. LX. 24. 4; Suet. *Claud.* 25; *Vsep.* 8. 6; Tac. *Ann.* XII. 58.
- 57) Plut. *Vit. Lyc.* 2; 5-10; 30.
- 58) ペイシストラトス一族の追放のこと (Hdt. V. 55-65)。Behr (1981), 369, n. 16 を参照。
- 59) Xen. *Hell.* II. 3. 2
- 60) Xen. *Hell.* II. 4. 1-23.
- 61) Thuc. VII. 57. 6.
- 62) cf. Aristid. *Or.* I. 261; 371. Behr は、前 370 年、レウクトラの戦いのあとに、アルゴスの上層部がスパルタに与したことを告発された際に生じた凄惨な事件と推測する。cf. Diod. Sic. XV. 57. 3-58; Isoc. V. 52; Plut. *Prae. ger. reip.* 814B.
- 63) 同じ箇所について論じた Franco (2008), 241f. はこの点にまで踏み込んでいない。
- 64) ここで述べられる自由については、一定の枠組みにおいて許容される、支配者たるローマ人が考えるところの「自由」という意味であろう。cf. 吉村忠典『支配の天才ローマ人』三省堂、1981 年、118-121 頁。
- 65) Thuc. VII. 57. 6.
- 66) ヘラクレスの子孫については、Hom. *Il.* II. 653f.; Strb. XIV. 2. 6. アスクレピオスの子孫については、直接的な言及をみつけることができなかったが、Strb. XIV. 2. 8 に、「ヘリオスの子孫らがその島を領有し」、彼らの子孫が都市を創建したとある。アスクレピオスは、ヘリオスと同一視されるアポロンの息子であることから、アリスティデスはこの創建にまつわる話を意識していると考えられる。また、ロドスとアスクレピオスの子孫との関係については、Aristid. *Or.* XXXVIII. 13 にも言及

がある。

- 67) Hom. *Il.* II. 655f.; 668f.
- 68) Aristid. *Or.* I. 335; XXVI. 29; 92-101.
- 69) Plut. *Prae. ger. reip.* 813D-F.
- 70) Aristid. *Or.* XXIII. 当該弁論については、E. Bianco, “Reciprocità e concordia nell’ orazione XXIII di Elio Aristide”, *Aevum* 83-1 (2009), 89-100 も参照した。
- 71) 実際、アントニヌス・ピウス帝期、ベルガモン、スミルナ、エフェソスの三市は、都市の称号をめぐって争っている。*I. Ephesos* 1489; 1489A; 1490. アリステイデスの記述も含めて、この争いについては、Heller (2006), 324-333 も参照されたい。
- 72) Isoc. *Paneg.* 19.
- 73) Bianco (2009), 91.
- 74) ストラボンによれば、アテナイのアンドロクロスがエフェソスの地に入植したという (Strb. XIV. 1. 3; 21)。スミルナとアテナイの関係については、同じくストラボンが述べるように、スミルナがエフェソスから分かれて創建された神話に基づくと思われる (Strb. XIV. 1. 4)。
- 75) Paus. I. 4. 6.
- 76) Hdt. VIII. 2f. cf. Aristid. *Or.* I. 137-149.
- 77) cf. Thuc. III. 82.
- 78) Paus. X. 3-4; Diod. Sic. XVI. 23. 1ff.; 38. 1f.; 59. 1ff.
- 79) 註 59 をみよ。
- 80) 註 60 をみよ。
- 81) ソフィストたちの同時代における競争環境については、Schmitz (1997), 97-135 が詳しい。
- 82) C. P. Jones, “Multiple Identities in the Age of the Second Sophistic”, in B. E. Borg (ed.), *Paideia: The World of the Second Sophistic*, Berlin, 2004, 13-21, esp. 15 もこの点を指摘する。
- 83) Bianco (2009).
- 84) A. R. R. Sheppard, “*Homonoia* in the Greek Cities of the Roman Empire”, *AncSoc* 15-17 (1984-1986), 229-252.
- 85) Swain (1996), 254-297.
- 86) L. Pernot, “Aelius Aristides and Rome”, in Harris and Holmes (2008), 175-201. Pernot は、「飾られた弁論 ἐσχηματισμένος λόγος」という古代に用いられていた修辞技法に着目し、ギリシア人、そしてアスクレピオス信者としてのアイデンティティに重きを置くアリステイデスの姿を導き出している。
- 87) K. Jazdzewska, “Do Not Follow the Athenians! The Example of Athens in Dio Chrysostom’s *Orations*”, *CPh* 110-3 (2015), 252-268. また、Jazdzewska は、ディオオン個人としても、アテナイを批判するプラトンなどをモデルとすることで、自らの弁論に信用や権威を付与していたとも述べる。
- 88) Dio Chrys. *Or.* XXXI. 120.
- 89) Aristid. *Or.* L. 19.
- 90) R. Webb, “Fiction, *Mimesis* and the Performance of the Greek Past in the Second Sophistic”, in D. Konstan and S. Säid (eds.), *Greek on Greekness: Viewing the Greek Past under the Roman Empire*, Cambridge, 2006, 27-46.
- 91) Dio Chrys. *Or.* XI.
- 92) デイオン・クリュソストモス (内田次信訳) 『トロイア陥落せず 弁論集 2』 京都大学学術出版会、2012 年、280 頁。
- 93) Jones (1978), 83-94; Sheppard (1984-1986).

《English Summary》

Past and Present in the Second Sophistic:

In the Case of Aelius Aristides

Masataka MASUNAGA

This paper argues the nature of the Second Sophistic in the high Roman Empire, exploring how the classical past to which many Greek writers frequently referred was described and how the past was contrasted to the contemporary society, based particularly on orations by Aelius Aristides, one of the most illustrious orators in the second century,

Focusing on the act of recounting the past rather than the content of the past described in the texts, previous researches have clarified that the Greeks recognized the classical past as a basis of their own identity and that many of them maintained or improved their social status by narrating the past as cultural capital. But, since scholars have emphasized the importance of rhetoric in the works of the Second Sophistic and on the aspect of the performance of the speakers, the narrated past itself has not been systematically investigated. However, a recent study insists on correspondences between the narrated past and the contemporary world and, as a result, indicates the possibility of further text examination.

This article attempts, therefore, to expose the relationship between the past and the present more clearly with a systematic inspection of the two political orations of Aristides, “To the Rhodians: Concerning Concord” (Aristid. *Or.* XXIV) and “Concerning Concord” (Aristid. *Or.* XXIII).

Although Aristides expresses some opinions expedient for the Roman rule in both orations, on the whole he underlines affairs of pride as a Greek. In this way, he depicts the classical past not only as confirmation of the people’s identity but also as a competitor which they should emulate and even strive to surpass. This competition with the past mattered to the orator himself too. Undoubtedly, Aristides kept in mind some distinguished writers or speakers who in the past had made addresses on the same subject. Accordingly, we should understand the past to which sophists referred not as mere nostalgic inclination, but as a kind of foil which indicated the present Greeks’ superiority.